

アジア系アメリカン・レズビアンによる

作品の萌芽と現在の課題⁽¹⁾

—『境界線のはざままで』(*Between the Lines*)⁽²⁾を中心に—

有馬 弥子

キーワード：アジア系アメリカン、レズビアン、フェミニズム

1. 米国の同性愛者——そしてアジア系ゲイ、レズビアンの課題へ

最近内外で、同性愛者の人権問題が以前よりは注目されるようになり、アメリカ合衆国ではこれに関する幾つかの法律をめぐっても、激しい論争が繰り広げられている。これに伴い、同性愛を取り巻く文化や、同性愛をテーマにした文学作品も、これまでになく脚光を浴びるようになってきたかのように見える。同性愛を許容しようとする方向へ回ろうとしている歴史の歯車と、その歯車にブレーキをかけようとする力が混在する昨今の日米の社会的潮流の中で、自身が同性愛者ではない筆者が、このテーマに関する文学作品を研究していることに、新たな意義と方向性を見出している。

現在米国に約7万人在住する100歳以上の人口の内ただ一人、同性愛であることを公にして一世紀を生きた女性ルース・エリス (Ruth Ellis) が最近101歳でミシガン州で亡くなった。米国の150万人ほどの90歳代の人口の内、同性愛者として知られている人々は少ない。これは、現在の米国の高齢者は、同性愛者の市民権の運動の発展に伴い、自分たちの同性愛性に対して正直であることができるようになる前の時代に育ったためである。アメリカで約50年前に同性愛者の市民権の運動が始まった頃の運動の創始者たちは、現在では高齢者となっている。その人々は、異性愛者には当然のように保証される社会保障や年金を“パートナー”から引き継ぐこともできずに、高齢となった現在、貧しい暮らしを強いられている場合が多い。また、未だに周囲

から特異な存在と見なされるので、同性愛性や同性愛者として生きてきた人生を完全に隠すなどの無理をしない限り、一般の老人ホームで余生を送ることにも困難がある⁽³⁾。

このように、米国の同性愛者に関する資料や、文学、研究に目を通すと、必ず、ゲイやレズビアンが米国社会の中でいかにマイノリティーであるかということが切々と語られている。米国社会の中の保守派やファンダメンタルなキリスト教の伝統の流れを継ぐ宗派の動きの力も小さくはないせいもあり、ゲイやレズビアンが、心理的にも制度的にも生活の上でも未だに冷遇される傾向があることは否定すべくもない。しかしそれならば、ただでさえマイノリティーであり“生きのびることが難しい”立場に置かれているゲイやレズビアンであるということに、少なくとももう一つ“生きのびることが難しい”要素、たとえばマイノリティーの人種——黒人やアジア系等々——であることが重なった時、何が起きるのか。そして、そもそもマイノリティーであるゲイやレズビアンのコミュニティーの中で、人種の問題に関しては何が起きているのか。この問題にメスを入れることは、人間性の業の本質に迫ることになるであろう。そしてまた、そのような他者の抱える本質的な業に翻弄される立場にある人々——たとえばアジア系のレズビアンら——が、どうそれに立ち向かい、いかにして団結し、生きることの希望を見出し、かつその希望を共に自らの多大な時間と労力を割いて構築していったかが、アジア系レズビアン作品には読み取れる。彼女らの作品や手記を読むと、そのような極めて能動的な行動力と情熱により、やっと彼女らが生きのびる道を探り自らの手で開拓したことがうかがわれるのである。そして、このような、時には挑戦的でさえある能動的な行動によりやっと生きのびることが可能になるという状況は、多くの種類のマイノリティーに共通した現象であることを強調しておく。このことに着目することこそが、本論の根源的な出発点であり、究極の結論でもある。

2. 統計とアジア系同性愛者

米国社会の中で、アジア系であり女性でありレズビアンであることは、統

計上はどうなっているのだろうか。2000年3月20日の*Newsweek*の同性愛者についての特集の中に、次のような数字が示されている。同統計によると、ゲイ、レズビアン、バイセクシュアルと自ら表明している有権者の数は1990年から1998年にかけて増加しているものの、有権者全体の中で占める割合は、65歳以上の年金生活者19.6%、アフリカ系アメリカ人10.2%、ラテン系5.3%に次いで、4.2%と、マイノリティーに属している。ここに示された統計を見る限り、アジア系アメリカンの人口は全米の中では1.2%とさらにかなり少ない。

一方では、たとえばカリフォルニアの都市部等々では、ヨーロッパ系アメリカ人は既にマイノリティーであり、現在の率で移住や出生が続けば今世紀半頃までには地域によっては現在の人種上のマイノリティーがマジョリティーになり得ることも指摘されている。昨年9月アジア系アメリカ文学会フォーラムにおける講演冒頭でエレイン・キム (Elaine Kim) 教授がこのことに触れたことは記憶に新しい⁽⁴⁾。上記の統計でも、アフリカ系アメリカ人、ラテン系、ユダヤ系、アジア系を合計すると19.5%となり、各々の有色人種は10%前後か10%を切るマイノリティーであっても、有色人種の有権者を足せば全米有権者の約1/5にもなることがわかる。果たして、各々の有色人種は、他の有色人種と団結して活動していくことはできるのか。この問いはそのまま、アジア系のレズビアンが、他の有色人種のレズビアンと共生し活動していけるのかという、アジア系レズビアンとその文学にとっての大きな課題に直結している。

ゲイ、レズビアン、バイセクシュアルの人口比が5%以下、アジア系アメリカ人の人口比が約1%と共にかなり少ない以上、この二つの要素の組合わさったマイノリティーである場合、さらに数値が落ちることは明白である。アリス・ホーム (Alice Y. Hom) らの言葉を借りれば、アジア系レズビアンであるということは、アジア系であること、女性であること、レズビアンであることの三要素が重なり、マイノリティーの中のマイノリティーの中のマイノリティーとなってしまうのである (ホーム 40)⁽⁵⁾。

3. 「三重の抑圧」(triple oppression) の中にある人々の放浪

——「境界線のはざままで」

マイノリティーであることが二つ以上重なることは、実際の生活上は何を意味しているのか。1987年に出版されたアジア系アメリカン・レズビアンによるアンソロジー、『境界線のはざままで』の中の幾つかの手記や作品は、マイノリティーとしての要素が二つ以上重なった結果の実感や実生活について叙述している。

『境界線のはざままで』は、アジア系アメリカン・レズビアンらが、自分たちの声を作品や出版物の形にして能動的に表明し始めた頃のパイオニア的な選集の一冊である。この選集の意義について論じるにあたって、アジア系アメリカン・レズビアンの声と作品が、米国社会の中の同性愛者やフェミニストらの成す全体像の中でも、有意義な色付けと貢献をしていると考え、『境界線のはざままで』に見られるフェミニスト的テーマやレズビアニズムの定義には、特に注目し論じた。同書に収録されている作品や手記の文学的価値については、筆者が判断を下すというより、アジア系アメリカン・レズビアンの作品の歴史を理解し、この分野の文学としての今後の成長を見つめてゆくために、ことに初期の出版物についてその政治的な側面をも含め包括的に解釈し、萌芽期の意味を確認しておくこととした。

『境界線のはざままで』の中で、苗字の記されていない日系アメリカン・レズビアン、アケミ (Akemi) という女性は、「アジア系アメリカン・レズビアンのアイデンティティーを求めて」(“Claiming an Asian-American Lesbian Identity” 17) という手記の中で、あるマイノリティーのグループの中にも、——そのようなグループは一般に、同じマイノリティーとして差別されている者が集り寄り添うことに特有な強い結びつきや cozy な居心地の良さがあるものであるが——、さらにもう一つのマイノリティーとしての要素を合わせ持ち、生活や居場所や同胞探しに困っている者が、自分以外に一人もいなかったことを語っている⁽⁶⁾。アジア系のコミュニティにはレズビアンは他には一人もいなかったし、レズビアンのコミュニティに居場所

を求めても、他にアジア系が一人もいなかった。同じセクシュアル・マイノリティーであるのだから、人種という差異を超え、アジア系であるアケミが受け入れられ溶け込めたかという点、そのような結果にはならなかった。それどころか、同じレズビアン仲間から、人種が理由で疎外される。自分たちがセクシュアル・マイノリティーとして差別される痛みを経験してきても、その体験は、他の種類のマイノリティーに対する共感を育みはしなかったようである。たとえば、他の種類のマイノリティーである人が、自分たちと同じセクシュアル・マイノリティーとして疎外される痛みを共有する者であったとしても、である。同じ痛みを持つ同種のマイノリティーの集団の中で、さらにこのように別の種類の差別や序列が発生し、マイノリティーの中のマイノリティーの人々を追いつめてゆくことは、実は稀なことではなく、人間性の業であると思われる。

このような状況の中で、マイノリティーの中のマイノリティーである人が受ける精神的ダメージは大きい。セクシュアル・マイノリティーとしての痛みを癒し合える仲間と思って入っていった場所で差別的なまなざしや言動を向けられる時、いっそう裏切られたという気持ちにさせられるからである。インディアンでありレズビアンであるバーバラ・キャメロン (Barbara Cameron) は、白人のレズビアンが同胞として信用できる者のような顔をしてインタビューに来た際に、その白人がインディアンの文化について差別的な言い方をした時、“裏切られた”とひとしお感じた体験について語っている (90-91)。このような、マイノリティーの中のマイノリティーの人々の心の動きを、他人と共感し合えることを安易に求めるのは甘えであるとか、同じマイノリティーならその中では差異や序列から生じる差別が全く発生しないと思うのはナイーブであるなどとして、一刀両断に切ることは簡単であるが、それは強者が上から見下ろして下した判断、論理に過ぎない。

日系のレズビアンであるアケミもまた、白人がマジョリティーであるレズビアンのコミュニティーに受け入れられなかったが、もとのアジア系の、cozyで家族や同胞のつながり等を大切にする伝統的だが暖いコミュニティに戻ってゆく道はなかった。そこでアケミは自分のアイデンティ

ティーと居場所を求める旅に出、最終的には、他の少数の仲間と共に、アジア系レズビアンのコミュニティーを創っていった。

アケミのこの手記に例を見るように、アジア系レズビアンによる作品や手記の多くは、自己のアイデンティティーの探究、つまり自分探し、また仲間や居場所探しのさ迷いの旅、また、安定や権力とは正反対の場所にいることからくる不安定な心情やさびしさ等々をテーマにしたものが多い。自己のアイデンティティーについては、周りに適応しようとしてばかりいる内に、自己のアイデンティティーを見失うという、カメレオンのテーマともいべきものも題材になっている⁽⁷⁾。このように、アジア系レズビアン作品には、多くの点で、アジア系作品一般と共通しているテーマも多い。しかし、アジア系が白人優位の社会の中でのマイノリティーであるとすれば、アジア系のゲイやレズビアンはアジア系社会の中でもさらに疎外されるマイノリティーの中のマイノリティーである以上、疎外、孤独、放浪、不安等々のテーマは、アジア系同性愛の文学の中では、さらに先鋭化された形で現れると言ってもよい。

『境界線のはざままで』というタイトルを代表しているA・カウェア・レメシェフスキー (A. Kaweah Lemeshefsky) の「境界線のはざまに生きる」 (“Living between the Lines” 20-24) という手記は、アイデンティティーと居場所を求める放浪の旅というテーマを最も典型的に語った体験談になっている。「混血女性の体験——コミュニティを探し求めて」 (“A Mixed Heritage Woman’s Search for Community”) というサブタイトルがついているように、レメシェフスキーは、母親が日本人、父親がインディアン、祖父がロシア人という三種類の血の混ざる混血であり、そしてレズビアンである。このように、マイノリティーとしてのアイデンティティーが幾重にも重なるレメシェフスキーは、文字通り放浪の旅をし「境界線のはざままで」生きてきた。レメシェフスキーは自分の体験を、同じように複数のマイノリティーとしてのアイデンティティーを持つ人々と分かち合いたいと願いこの手記を発表した、と結んでいる。

4. アジア系レズビアンとフェミニズム——共有点と相克

(1) アジア系レズビアンの生活と女性問題

次にさらに、アジア系のゲイにはなく、アジア系レズビアンに特有のテーマや課題は何なのかを考えてみたい。須藤達也は、近年アジア系の映画の中でも同性愛が取り上げられるようになってきた *Queer New Wave* と呼ばれる流れに触れた上で、ゲイに比べるとレズは扱われることも少なく、制作に携わるレズの監督も少ないと述べている。この理由としては、主にテーマがマスコミ受けせず資金の調達が難しいからだと言ったキムベリー・ユタニ (Kimberly Yutani) を引用している (須藤 48)。ゲイに比べレズビアンのテーマがマスコミ受けしないということ、ゲイに比べレズビアンのテーマのための映画製作は資金の調達が難しい、という下りには、かなり象徴的なものを感じさせられる。

では、同じアジア系同性愛者の中で、ゲイとレズビアンの間の差異や隔たりは何なのかと言え、多くの場合、男女の不平等や隔差の問題と重なる部分が多い。たとえば、『境界線のはざままで』の中でレメシェフスキーは、男女の雇用形態や賃金の格差等は、そのままレズビアンのカップルにとっての経済的困難、つまり生活が苦しいことに直結すると述べている。レメシェフスキーがこの問題を論じている手記は「二つの国で：日本とアメリカの日本人レズビアン」(“Facing Both Ways : Japanese Lesbians in Japan and in the U. S.” 37-41) と題されており、日本国内および米国に在住する日本人のレズビアンの状況について書いている。レメシェフスキーは、日本での独身女性にとっての経済的困難はそのまま、レズビアンのカップルにとっての困難となる、としている。手記はまず、日本では女性が独身であることは普通とは見なされていないため、“普通の” 異性愛結婚をしないレズビアンは当然普通ではないと見なされるとしている。さらに、女性は異性である男性と結婚し退職し、結婚の中で生計を立てることが一般的であるとされているため、女性が長く働き続けることが難しく、女性二人で生計を立てようとするレズビアンのカップルは生活が苦しくなると述べている (38-40)。

『境界線のはざままで』は1987年に出版されており、同書中の他の作品や手記に比べ、レメシェフスキーの手記のこの下りは特に内容がかなり古いように感じられるものの、ゲイとレズビアンとの差異について考える時、必ずしも過去のものとは言い切れない。1987年の時点でレズビアンが抱えていた問題は15年後の現在、決して解決されているとは言えない。ちなみに、男女不平等の問題も現在では完全に解決したとは誰も言えない。

そして、社会全体のスケールの中で考えるとき、男女の不平等や差異やそこから生じる生活上の不都合を、新世紀に入った今でも最も顕著な形で被るのがレズビアンのカップルなのではないか。このように改めて男女の差異について読者の目を開かせてくれる点でも、アジア系レズビアンの声は、女性問題にとっても大きな役割を果たしている。

カップルである二人という個人的なスケールで考えるならば、レズビアンのカップル二人の間では、異性愛の夫婦二人の間においてよりも、経済的にも生活、社会的地位の上でも、お互い人間として平等な関係を築くことが可能であるようにも見受けられる。かりに同性愛者のカップルによくある男役、女役という区別のようなものが二人の間にあったとしても、それは生物学的な区別として絶対視、神聖視されがちな異性間の男女の区別に比べれば、お互いの合意、選択によるものと言えるのではないだろうか。もちろんこれはゲイのカップルにも当てはまることである。昨今、同性愛のカップルが子供を adopt することや、それをめぐる法律などについて、特にアメリカでは激しく議論されているが、子供を持つか、子供の養育や教育をどうするか、ということ一つを取っても、同性愛のカップルならばゲイであれレズビアンであれ、二人の間で決めるしかない。このように、同性愛ならば、異性間のカップルよりも平等でありやすいという理由で、少なからぬ数のフェミニストたちは、フェミニズムを極めるならば、レズビアニズムに行き着くとし、男性との性的な関係や男性と生活を共にすること完全に拒み、男性のいない女性だけで生活する国、ユートピアを唱えさえした⁽⁸⁾。

しかし、現実には、現代の日米の異性愛主流で、かつ男女間および人種間の不平等の残る社会の中では、同性愛者で被差別人種で女性である二人とい

う組み合わせのカップルは、男女の隔差を最も顕著に受けやすい組み合わせであると言える。この点において、アジア系レズビアンのカップルという存在は、女性問題に、特殊視もされているかもしれないが二人とも女性であるがゆえに最も典型的な形で、新たな角度から社会的な問題提起を投げかけ直している。

男女同権が唱えられるようになってから久しいが、日本やアメリカ等では法律上も社会の雰囲気の上でも明らかに以前よりは男女平等が実現しているが、それだけに未だに解決せずに残っている男女間の不平等というのは逆にきわめて見えにくくなり、取り残されようとしている。男女平等の風潮が押し進められた結果、異性愛のカップルの間では、経済的、また生活上の役割分担等、以前よりは格段に柔軟になり、夫婦の生活形態も女性の生き方も、はるかに自由になり選択肢が増えたかのようなのである。しかし、根本的には、未だに男性が働くことが経済的に有利であること——つまり女性より男性の方がより少ない労働時間、あるいはより高い地位でより多くの経済的報酬を得られる傾向にあるということ——が、夫婦や家族の生活の根幹を成してはいないか。一家のある年齢層の男性が働くことにより経済的基盤が安定するという大前提が守られて初めて、そのような経済形態を中心にし、妻はパートで働き、夫も少しだけ家事を手伝う等々の他のバリエーションが可能になる。一見、選択肢が増え自由になったかのように見える風潮の中で、ある年齢層の男性の収入という昔ながらの“柱”が失くなってしまえば——たとえば母子家庭などで——、結局生活そのものが揺らいでしまい、小手先のバリエーションどころではなくなり苦境に追いやられる現状は、一向に変わっていない。

レズビアンのカップルの場合には、両方が非男性であるため、そのような安定的な経済的柱というものを建てにくい。従って、当然一般的とされている男女の夫婦については見えにくくなった経済的な、また社会での立場上の男女の隔差が、皮肉かもしれないが、一般的と見なされていないレズビアンのカップルの置かれる経済的苦境に焦点を当てることにより再認識されるのである。

レズビアンでない異性愛結婚をしている女性、レズビアンでない woman identified woman, またレズビアンでない独身女性等々、レズビアンではない他のタイプの女性も、アジア系レズビアンであるレメシェフスキーのこのような手記に触れることにより、フェミニズムはレズビアンを排除すべきではないという姿勢を確認できる。またレズビアンの側でも、フェミニズムとどう連携するかという、もう一つの大きな課題を投げ出してほしくはない、と思わされる。

(2) アジア系レズビアンと woman identified woman——ホモフォビアの恐怖とエロス

それでは、レズビアンではないフェミニスト、あるいはレズビアンではない woman identified woman について、『境界線のはざままで』の中のアジア系レズビアンはどう考えているのだろうか。この点については、同書中のアヌー (Anu) という女性による詩の形式とも見える「レズビアンとは？」 (“Who is a Lesbian?” 26) という一篇が啓発的である。アヌーは、レズビアンと、woman identified woman や女性同志の連帯を尊重し大事にする女性の間には、決定的な違いがあると述べている。それは必ずしも対決等を意味してはいないにせよ、レズビアンとは誰かという定義が婉曲を一切ぬきに語られ、その定義に当てはまるレズビアンであるか、そうでないかによって、置かれる立場と状況が決定的に違ってくることを強調している (26)。この一文を読んだ読者は、読む前は同性愛者やレズビアンが何なのかあまりはつきりわからなかったり、おぼろ気なイメージを抱いていたたり、女性と非常に親しい女性がレズビアンに近いくらいに思っていたのが、レズビアンとはどういう人々のことなのか、はつきり認識できるのである。アヌーによれば、性的に女性を愛するということが、ある女性がレズビアンであることの決定的な定義であり、このことが、根本的にはそのレズビアンの女性の置かれる社会的状況を決定することを強調している。これは全く歯に衣を着せない表現になっているが、この定義に示されている事実にはつきり向き合うと、逆に同性愛を忌み嫌うホモフォビクな社会の特徴というものも浮かび上がっ

てくるので、かなり興味深い。

アヌーの言っていることは、レズビアンとは女性を性的欲望や性行為の対象として見たり感じたり、またそれによって行動する女性ということである。ここで、異性愛度、同性愛度を計るキンズィー・スケール (Kinsey scale) に関し挙げられている項目の内容を見てみよう。社会的には、あるいは感情面では、異性／同性といるのとどちらがより comfortable であるかという項目に混じって、異性／同性のいずれに性的に感ずるか、興奮させられるか、といった意味についての項目では、“Who turns you on?”という米俗語が用いられている⁽⁹⁾。アヌーによるレズビアンの定義は、これらの親近度の諸項目、社会的な要素、情緒的な要素、性的な要素等々の中で、とりわけ同性が同性、女性が女性に性的に魅かれる、という要素を強調している。

ここで重要なのは、アヌーらは、社会の側がこの定義に当てはまるレズビアンをどのように扱うのかという問題を、繰り返し強調していることである。社会がその女性を特殊であると、ことさらにマークし、彼女の周りにくっきり円を描くのである、としている。アヌーがそれ以下のパラグラフで書いている内容を比喩を用いてまとめるなら、性的な意味で女性に魅かれる女性であるという定義に当てはまるレズビアンである、という円がある女性の周りにいったん引かれると、このレズビアンの女性を目がけて、周囲の社会からホモフォビアの石がいっせいに投げつけられるのである (26)。特定の女性と非常に親しい、という程度のカモフラージュされた表現抜きに、この定義に当てはまることが明らかになった女性は、自らカムアウトしたにせよ、はからずも周囲に知られてしまったにせよ、社会的制裁を逃れることはできない。アヌーの書くところによれば、そのような制裁は、文字通り、人通りで殴打されることであったり、(レズビアンの) 恋人から引き裂かれることであったりする (27)。

このようなホモフォビアの現象は、人種にかかわらず歴史的にゲイやレズビアンらの身に起こってきたことである。ドイツ・ナチスのユダヤ人強制収容所で、同性愛者らは、最も残酷な拷問をされたグループの一つであったという。エイズと同性愛をテーマにしたアメリカ映画『フィラデルフィア』

(*Philadelphia*) では、エイズを患っているゲイの主人公を解雇する雇用者は裁判の中で、昔、軍隊にゲイがいて彼が男性たちに対し性的な態度を示したという話題に及んだ時、隊員らはその男性の顔を「便器につっこんでやりましたよ」と嘲笑的に述べ回顧する。徹底的にホモフォビックなこの雇用者を演じる俳優の演技による、侮蔑に満ちた薄笑いと言調とは、この映画の中でも最も際立った演技であったように感じられた。『フィラデルフィア』は1993年にアカデミー賞を受賞している。これらのごくわずかな例であるが、人種にかかわらず歴史的に、ゲイもレズビアンも、ホモフォビアという名の憎悪とヘイトクライムの対象になってきた。アヌーの「レズビアンとは？」は、アジア系という文脈の中でこのことを指摘したもう一つの証言となっている。

レズビアン性の中の女性が性的に女性に魅かれるという点に、ことさらにこだわり、ことさらにマークするのは、あくまでホモフォビックな社会の側であり、アヌーの文章によれば、レズビアンの側では、自らのセクシュアリティ、つまり女性を性的に愛する女性であるということは、彼女たちにとって最も重要なことというわけではない (26)。レズビアンの側では、レズビアンとは、異性愛／同性愛の親近度のスケールに関する諸項目にもあるように、性的な意味のみならず、精神的、心理的、社会的等々、かなり包括的な意味で同性である女性に愛情を抱く女性たちということになるのである。男性が女性を愛する、というヘテロセクシュアルな関係においてこそ、異性である男性は女性を性的な対象としてしか見なしていない場合が多いのではないか。しかし、異性愛の性的な関係は、あまりにも一般的に受け入れられているどころか、異性間の性行為によって種族が保存されるという概念のせいであろうが、神聖視さえされているので、誰も周りに円を引いたり石を投げつけたりはしない。ストーカーや暴力や監禁や殺人等に到るような特殊なケースを除いて、特殊視されたり病氣と見なされることはない。しかし、同性が同性を愛するケースにおいてこそ、生殖という機能が異性間においてより薄いからこそ、性的な要素以外の、精神的、心理的、社会的愛情等がより育まれるのではないかと想像するのは、自らが同性愛者ではない者

の勝手な幻想であろうか。

確かに、同性が同性に愛情を抱くことには、異性愛間よりは生物学的な性的な意味が薄い分、ロマンがあるように受け取られることもある。フェミニズムとまではいかななくても、女性の間での友情や連帯等は、多くの英米の文学作品の中でも美しく貴重なものとして描かれてきた。フェミニズムの運動やフェミニスト的テーマを扱った文学作品等においては、これらの *friendship, sisterhood* 等の女性の間での連帯や愛情は、男尊女卑の社会の中で生き抜くために不可欠な方法、また、望ましく美しい生き方、テーマとしても多く謳われてきた。そのような特にフェミニスト的な流れの中で、従来の、支配者、被支配者の関係に陥りがちなヘテロセクシュアルな男女の関係を越えた、より望ましい理想的な愛情関係を開拓し模索するために、レズビアンズムが提唱されたこともあったことには、先に触れた。ところが一方で、アヌーがアジア系という脈絡の中でいみじくも述べているよう、ひとたび性的な意味が含まれると、女性の間での関係というものを突然異端視するホモフォビアは、一般社会の中に、そしてフェミニズムの中にも長いこと充満していた。フェミニズムとレズビアンズムの関係は、深く連携しながらも、複雑極まりない歴史をたどってきた。レズビアンであってもフェミニストではない女性、またフェミニストであってもレズビアンでない女性たちはいくらでもいる。アジア系のアヌーが、レズビアンは単なる *woman identified woman* ではないと明言している (26) あたりは、なかなか根の深いものを感じさせる。なぜアヌーたちがこういうことを明言し、あえてレズビアンのセクシュアリティについてこれほど赤裸々に主張するのか、ここでもう一度確認すると、フェミニストよりレズビアンの方が、より社会の迫害を受ける、ということなのであろう。確かにフェミニストも社会の中でポピュラーな存在とは言い難いかもしれないが、過激なまでに男性を敵視しない限り、ホモフォビックな一般社会の中で、レズビアンほど異端視されないのではないか。さらに、過激なまでに男性を敵視するフェミニストでさえ、レズビアンでない限り、レズビアンほど異様な目では見られない。男性を敵視するほどのフェミニストは“過激”ではあっても“異様”ではないのである。

また、女性間の連帯ということにおいても、性的な意味を含むかどうか、つまり、“レズビアン”であるかないかの一点をめぐり、社会は異常に厚いホモフォビアの壁をつくる。つまり、女性どうしのつながりがどれほど強く深くても、性的な感情や関係がない限り、基本的には、完全に社会に容認されるのであり、場合によっては望ましいとされたり美化さえされる。特に保守的で、ホモフォビアの傾向が非常に強い社会では、女性どうしの連帯や関係は望まれたり、美化されたりする場合も多い。女性だけで一緒にいさせ固めておくことは、夫や親族以外の男性や一般社会から女性を隔離しておくためには最も好都合な方法であるし、そのような女性のサークルで行われる慈善活動や、礼儀作法や、趣味のクラスなどは、妻や親族の女性をさらに女性らしくさせるからである。こうして保守的な社会の中では、女性による慈善団体や趣味を中心にしたグループ等が百花繚乱となる。また、保守的でホモフォビクな社会でこそ特にその傾向があるが、女性間のつながりや友情が、どんなに強く、どんなに感情的でセンチメンタルでも、もちろん容認される。さらに社会的な絆も強く社会に影響力を持つような活動さえしていても、あるいは女性どうしで同居さえしていてルームメイトであっても、その一線を越えていないと見なされさえすれば基本的には完全に容認されるのである。だから、同性愛者らは、非常に親しい友人やルームメイトであるということを通しておけば、社会的制裁にさらされることもない。事実、ゲイやレズビアンの中には、職場や社会、あるいはホモフォビクな家族に対してはカムアウトせず親しい友人であることで通し、信用できる友人のサークルの中でだけカムアウトし恋人であることが知られている、というふうに、生活の中で使い分けをしている人々も多い。これはもちろん、職を失う等々、生き残りにかかわる社会的制裁や、不必要に不愉快な目に遭うのを避けるためである。しかし、そのような生活上の使い分けが精神的に無理になる場合も多々あることは、拙論「日系レズビアン作家研究の展望」の中で、「分解のテーマ」として詳しく論じた(40-47)。アヌーが述べるように、性的な事柄は必ずしも同性愛性の全てではないのであるが、同性愛者にとっても性的な要素を抜きに、あるいはそれをひたすらカモフラージュし続けて同性愛の

関係を語ることは、便宜的には可能であっても根本的にはできないのである。

『境界線のはざままで』の中でも、数篇は、性的な意味でいかに相手の女性が自分を魅了するか、また性的な行為の感情的な昂揚について、言葉は美しいが包み隠さず綴られている。一例として、やはりアヌーによる「シュリンガー」(“Shringar” 27) という一篇は、恋する女性の肉体的な魅力、その女性の目、肌、長い黒髪、腹部、肉体にまとわりつく衣装、香り等について、詩の形式で微細に官能的に描き、この女性に対する恋愛感情の発露で締めくくられている。「シュリンガー」の中で、相手の女性はサリーをまとっており、この一篇はインド系の女性に対する恋情を謳っていることがわかる。

1991年に有色レズビアンによる選集として出版された『心の一片』(*Piece of my Heart*) の中では、周囲に対してカムアウトすること、社会の中で不可視な存在のままに葬られるのを拒むこと、力を得ていくのを目指そうとすること等々の、社会的な内容をテーマにまとめたセクションに並んで、「渴望と情熱」(“The Wanting and the Passion”) という題のもとに、性的な情熱や肉体関係を謳った作品がまとめられているセクションがある(311-38)。このセクションについて、同書の編者M・シルヴェラ(Makeda Silvera)は序文の中で、「この世が醜く汚れている時このセクションを読みましょう、と言う以外に何が言えましょうか」と述べている(xix)。

ポルノグラフィックな描写やエロティカの文学的な価値については意見の分かれるところかもしれない。しかし、同性間の関係の特に性的な要素を社会がホモフォビックな批判のターゲットにするというのが現実であるならば、たとえポルノグラフィックな表現が大胆であったとしても、同性愛について論じるにあたって避けて通ることのできない部分であろう。アヌーによる「レズビアンとは？」と、レズビアンの性の大胆な解放を謳った諸作品を並べて読む時、抑えられない情熱が、そこに絡みつく社会の鉄の枷に抗い呻く様が見えてくる。

5. 結語——マイノリティーを読み解く色調の哲学

『境界線のはざままで』の中に、女性問題の視点やレズビアニズムの問題に混じって、アジア系という人種を表す「黄色」という言葉をそのまま使い、その心情を詠った詩、「私の月が落ちる」(“My Moon Will Fall” 18)がある。この詩は、夜の岸壁に立ち海へ身を投げようとしている女性の姿を題材にしていて、「私の月」が落ちてもそれを見る者、気付く者は誰もいない、という内容の書き出しで始まる。次のスタンザでは、「黒と白の世界の中で、白・赤・黒・茶と混じった黄色の微妙な色合いに誰が気付くであろう」と続けている(18)。長いこと出版が待たれ今年ついに発刊された『アジア系アメリカ文学——記憶と創造』のプロローグには、いみじくも「アジア系文学はすでに十分カラフルである」とある(植木 xiv)。黄色であれ何色であれ、「微妙な色合い」、つまり聞こえにくい声を探し耳を傾けていくことが、マイノリティー研究の道のりであることが、『境界線のはざままで』の中の「私の月が落ちる」の一フレーズからも改めて思い起こされる。アジア系の黄色にセクシュアル・マイノリティーという色付けが加わるとき、それを何色に喩えたらよいのだろうか。レメシュフスキーは、セクシュアル・マイノリティーという色付けについては、いかなる思いをはせつつ、アジア系の黄色に言及しこの詩を詠んだのだろうか。夜の空と海と岸壁、この黒一色の世界に、triple oppressionの絶望の色を編み込んだのだろうか。

人間の原点、原罪に迫る暗い絵を描き続け、その宗教性が留学先の修道院でも高く評価された画家、福島瑞穂は、以下のように述べている。「私にとって生きているということは『重い』『暗い』ことで、ピンクやブルーで私の世界は表せないですね。色はなくてもいいと思っています。」

一方、筆者は、『英米文化の光と影』に収録された拙論の中で、アジア系レズビアンらが自らの声を発表し出版物なども出てきたことについて、彼女らがあえて陰から光の中に出始め、有色のレズビアンであることは、もはや、光の存在しない闇に包まれたブラック・ホールではなくなったとしている(有馬 52)。しかしこれは、闇や黒に喩えられる人間の業、原罪——差別等々——が未だにありとあらゆる場所に存在し続けるという事実を否定するものではない。むしろ、問題や原罪を直視することによってこそ光を見出

そうとするスタンスに立っている。

何重にも抑圧されるマイノリティーの人々の声——それを色に喩えるなら黒一色である場合も含め——に丸ごと耳を傾け現実を直視してこそ初めて、その人々の生に一条の光がさす可能性が生じる。これまで『境界線のはざままで』に見てきたように、アジア系レズビアンらは、齒に衣を着せない言葉で自らの置かれている現状を分析し見据えてきた。それによって彼女らは、抑圧され生死の絶壁に立たされながらも、生き延びるための生命力を獲得したのである。経済的、物質的、社会的にかなり恵まれた生活をしながらも、物質主義におかされた国々に住み生命力を失った人々と、彼女らのような人々をどう比べたらよいのだろうか。

カラフルな中にも微妙な色調を読み取っていかなければならない点で、アジア系アメリカ文学、およびアジア系によるセクシュアル・マイノリティーをテーマにした文学の研究等々、マイノリティーの要素が幾重にも織り込まれるタペストリーを読み解かんとする研究には、研究者本人がそのマイノリティーではない場合は、特によほどの高度な文学的感度が要求される場所である。しかしそれでも、そういった研究者らを揺さぶり駆り立てていくのは、マイノリティーの人々の、抑圧され尽くしても抑えることのできない“生きのびたい”という生命の根源的な希望から湧き起こる能動的な行動力、つまり物質に取り囲まれた多くの近代人が失ってしまった生命力であり、うめきの中から発せられた声なのである。

註

- (1) 本稿は、2001年3月10日、早稲田大学で行われた第48回アジア系アメリカ文学研究会例会において口頭発表した内容を基に執筆したものである。
- (2) *Between the Lines* については、これ以降、『境界線のはざままで』という拙訳を用い、ここからの引用、および他の英語による文献からの引用やタイトルもまた拙訳を用いた。
- (3) これらの情報は、米国テキサス州ダラス郊外の町デントンにある、ゲ

イ・レズビアン教会の会報 (*The Good News Letter*) から得たものであり、頁数は打たれていない。同地域は、米国南部の中でも特にファンダメンタルな色彩の濃い地域、バイブル・ベルト上にあり、ホモセクシュアルに対する偏見は強い。

- (4) キム教授のこの指摘については拙論「日系レズビアン作家研究の展望」の最終セクションの注の中でも触れた (有馬 54頁)。
- (5) ホムのこの表現については上記拙論の第二セクション「アジア系レズビアン選集に見る、分解のテーマ」の注の中でも触れた (54頁)。
- (6) アケミの手記のこのような内容については、上記拙論「日系レズビアン作家研究の展望」の中でさらに詳しく論じた (36-37頁, 40-46頁)。
- (7) このテーマについては、2000年9月のAALAフォーラムで、吉田が、*Catfish and Mandala* 中の「カメレオン」という表現を含む下りを引用し論じた。また、『境界線のはざままで』の中にも「カメレオンのように」 (“Like a Chameleon” 34頁) という詩があり、このテーマの切実さが伝わってくる作品となっている。
- (8) この内容について簡潔にまとめている例としては、『フェミニズム事典』 (*Encyclopedia of Feminism*) 中の Lesbian Nation, lesbianism, lesbian-feminism の項目が参考になる (178-81頁)。
- (9) 親近度の要素については、フリッツ・クライン (Fritz Klein) がかけた項目を参照した。クラインは、アルフレッド・C・キンズイー (Alfred C. Kinsey) の提唱した異性愛度および同性愛度の度合のスケールに関連してこれらの項目をかかげている。これらの内容は、『バイセクシュアリティ』 (*Bisexuality*) の中でウーディス=ケスラー (Udis-Kessler) によりまとめられている (49-56頁)。

Works Cited

Cameron, Barbara. “Gee, You Don’t Seem Like An Indian from the Res-

- ervation.” 『英語で読むアメリカのフェミニズム』 藤枝滯子・松野潔子他著 創元社 1991 87-92頁。
- Clendinen, Dudley. “Taking Care of Our Own.” *The Good News Letter*. Denton : Harvest Metropolitan Community Church, Volume 11, Issue 2, 2001.
- Chung, C., A. Kim, and A. K. Lemeschewsky, eds. *Between the Lines : An Anthology by Pacific / Asian Lesbians of Santa Cruz, California*. Santa Cruz : Dancing Bird Press, 1987.
- Hom, Alice Y., and Ming-Yuen S. Ma. “Premature Gestures : A Speculative Dialogue on Asian Pacific Islander Lesbian and Gay Writing.” *Critical Essays : Gay and Lesbian Writers of Color*. Ed. Emmanuel S. Nelson. New York : The Haworth Press, Inc., 1993. pp. 21-51.
- Kim, Elaine. “In the Aftermath : Korean American Survivals of U.S. Wars in Asia.” 第8回 AALA フォーラム特別講演 学士会館 2000年9月24日。
- Leland, John. “Shades of Gay.” *Newsweek*, March 20, 2000. pp. 46-49.
- Silvera, Makeda, ed. *Piece of my Heart : A Lesbian of Colour Anthology*. Toronto : Sister Vision Press, 1991.
- Tuttle, Lisa, ed. *Encyclopedia of Feminism*. Essex : Longman Group Limited, 1986.
- Udis-Kessler, Amanda. “Notes on the Kinsey Scale and Other Measures of Sexuality (1992).” *Bisexuality : A Critical Reader*. Ed. Merl Storr. London : Routledge, 1999. pp. 49-56.
- 有馬弥子 「日系アメリカン・レズビアン作家研究の展望」『英米文化の光と影』 恵泉女学園大学英米文化学科編 彩流社 2001 33-54頁。
- 植木照代 「プロローグ：記憶は未来を創造する力」『アジア系アメリカ文学——記憶と創造』アジア系アメリカ文学研究会編 大阪教育図書 2001 v-xvi 頁。
- 須藤達也 「第16回サンフランシスコ・アジア系アメリカ映画祭に参加し

て」 *AALA Journal*, No. 5, 1998 43-51頁。

福島瑞穂 「姉妹たちよ：女の暦 2001」 9月 女の暦編集室編 ジョジョ
企画

吉田美津 「ベトナム系アメリカ文学と戦争」 シンポジウム：「アジア系ア
メリカ文学と戦争」 第8回 AALA フォーラム 学士会館 2000年9月
23日。